

正式な出版の外に隠れた知識、灰色文献（グレイ・リテラチャー）

記事のURL

<https://www.gklibrarykor.com/ja/article/9788/>

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

論文を書いたり課題を準備したりするとき、私たちはふつう学術誌や本から探し始めます。しかし、政府機関が出した研究報告書、企業が公開した技術文書、大学院生の学位論文、学会で発表された資料のように、書店や学術誌の目録にはなかなか載らない文書も膨大にあります。こうした資料をまとめて呼ぶ名前が「灰色文献（グレイ・リテラチャー、Grey Literature）」です。灰色文献とは、簡単に言えば、商業出版社や正式な学術出版の流通経路を通さずに、政府、大学、企業、市民団体などの機関が直接作成して公開した資料のことです。内容は充実していても探しにくく、品質もまちまちなため、図書館や研究者にとって常に厄介な課題となっています。本記事では、灰色文献という言葉が生まれた背景と定義から、代表的な資料の種類、研究で必ず押さえるべき理由、そして探しにくく保存しにくい問題とその解決への取り組みまで、順に見ていきます。コーネル大学・モナシュ大学・ワイカト大学の図書館ガイドを参考にした説明図。灰色文献は発行・流通経路による分類であり、査読の有無・品質・再利用の権利は資料ごとに確認する必要があります。参考：コーネル大学図書館・モナシュ大学図書館・ワイカト大学図書館 出版の境界の外にある知識「灰色」という名前がつくまで 灰色文献という言葉が広く使われ始めたのは1970年代でした。その背景には、第二次世界大